

第4回 少子化と子どもの野生化

核家族という言葉が盛んにいわれ始めた頃から何十年経つであろうか。それはある意味では高齢者の孤独さを思い起こさせるような言葉でもある。また一方では、それは社会の少子化への移行とそれに伴う多くの問題をも想起させる。現在わが国では、高齢化と少子化が同時にしかも非情に速い速度で進行しているという、世界のなかでも類をみないほどの特殊な社会状況にあり、経済や医療などに大きな課題が噴出している。わが国の合計特殊出生率は、人口維持に必要な2.08を下回った1970年代後半から減少傾向が続き、最近では2002年1.32、2003年と2004年は1.29となり、2005年は1.25まで低下した。一方、65歳以上が総人口に占める割合は近年次第に上昇し、2003年には19%であったが、2020年には28%ないし29%と、現在から15年後には10人に3人が高齢者になると推定されている。

日本経済は、第二次世界大戦後の1947年から49年のベビーブームといわれる年に生まれた団塊の世代の成長と並行するように高度成長を遂げてきた。しかしながら90年代のバブル経済の崩壊とそれに続く不況は10年以上に亘って持続し、日本社会は厳しい冬の時代を経験した。またそれは、その時代を生きる人々の心にも大きな影響を及ぼした。日本社会は、半世紀以上に亘る期間でグローバリゼーションと称される欧米化へ急速に移行した。このことは、とくに成長期にある人間の精神構造を従来の日本的なそれとは異なった方向に転換させていったといっても過言ではない。このことは、それまで日常生活のなかに存在していたわが国のある意味では美德とされてきた多くの事柄が希薄になるか、喪失されたことをも意味する。生活様式の変革や物質的豊かさの進展とともに日本国民の精神構造にまで変化が及んでいる。団塊の世代の高齢化によって社会経済の大きな変化が現実となりつつあるいま、社会的あるいは個人的な価値観や倫理観などをめぐって、これまで予測された以上にマイナス面の多くの課題が前倒しで顕正化してきていると考えられる。

このような日本社会の現況は、たとえば武士道というような日本の伝統的な社会通念ないし情緒を全国的に評価する意図はないものの、日本の伝統にみられるような美学的精神は断片的だとしても、捨てがたいものがあると思われる。最近の政治・経済・社会面などにおいて次々と発生する巨悪犯罪や痛ましい事件の背景には、制御されなくなってしまった現在社会に生きる人々の精神構造がある。卑近なところから、最近の世相から見出されることとして大人も子供も含めて全体として言いうることは、他人のせいにする、恥を知らない、倫理観に乏しい、自己中心的である、他人の心を忖度できない、などのかつては希薄であったような社会風潮である。

武士道は、鎌倉時代に勢力が強まった武士階級の中に発達した肯定的な精神的支柱となる思想であるが、群雄割拠の戦国時代にはそれほど目立つべきものではなかった。しかしながら天下統一され、封建制度が確立した江戸時代に為政者により推進された。江戸時代には将軍の侍講として長く続いた朱子学派の儒学者らを中心として封建身分制を絶対的なものにするための秩序思想として広められた。江戸時代初期の著名な儒学者としてあげられるのは藤原惺窩であるが、その門人の林羅山は家康以後四代に亘る将軍の侍講を勤めた。また木下順庵は四代将軍綱吉、その弟子の室鳩巢は八代将軍吉宗の、それぞれ侍講を勤めた。江戸時代にはその他にも多くの歴史に残る儒学者輩出した。江戸幕府が創設した後の東京帝国大学の前身となる学問所である昌平黌は、儒学を中心として主として旗本や御家人の子弟を教育した。江戸後期に昌平黌教官となった儒学者紫野栗山は、蘭学を含む異学を禁止する建議を行っている。

武士の道徳あるいは生き様として確立された日本独特の武士道と対比されるのが、中世ヨーロッパに発生した騎士道である。騎士道は、戦闘において戦力上重視された騎兵の行動に倫理的要素が導入されて成立したとされ、当時のカトリック教会の影響が大きく働いた。騎士道入門の基準は、品位ある行動を重んじるように発達し、12世紀の初めには騎士に相応しいとされる行動規範が定着した。聖書の教えと教会の掟を尊重し、忠誠を重んじ、個人的名誉を守るべきことなどが要求された。騎士道は、名門の子弟を対象にした点では武士道と類似しているが、キリスト教の影響を受けながら発達したために、神を敬うことや寛容であること、さらには女性への奉仕などが徳の理想のひとつとされた。十字軍の衰退や騎士軍の戦力低下などにより、15世紀頃には騎士道の尚武思想は次第に失われ、やがて雅な当世風の流行にすぎなくなった。

武士道は、忠誠や名誉などという騎士道と同じような思想の他に、廉恥、潔白、質素、犠牲などの尚武思想が強烈である。このような武士道がいまだに懐古されているのは、その思想が日本人の感性に合っているためであろう。前に述べたような現代の無責任ともいえるべき社会風潮は、わが国の精神文化のなかに組み込まれてきたよい意味での武士道精神とは相反するものである。言い換えれば、武士道のなかに現代の問題に対処するための方策に貢献するに値する精神を含んでいるのではないか。

かつて海洋観測所があった鳥島で観測所が閉鎖されるに当たって残してきた鶏が次に行ってみると空を飛んでいたという話を聞いたことがあるが、これは野生化しないと生きていけなかったからである。動物の野生化現象は枚挙に暇がないほどであるが、現在捨てられたペットの野生化が社会問題化している。1970年代のテレビ番組「あらいぐまラスカル」の影響に

よるペットブームでアライグマの輸入が一時は数万頭輸入されたということであるが、現在野生化したものが多く繁殖し、有害動物化している。ペットとして飼育されてやがて捨てられて野生化した動物はほかにもブラックバス、タイワンス、インコ、ハリネズミ、ミシシippアカウミガメなどがある。これらのなかにはアライグマと同様に、日本の生物層全体に与える影響が懸念されているものがある。

ペットの例に挙げて恐縮だが、子どももある期間放置されると野生化する。子どもの野生化に関しては、筆者自身が自分の息子達のことですれらしい気配を感じたという経験がある。現代の子どもたちが野生化する現象は、社会生活に適応すべく教育されることや制御されることから開放されてしまったことの結果を表現していることにほかならない。子どもの野生化が進行すると、社会の種々な面での歪みの影響を受け、子ども達の倫理観はさらに低下し、無責任な行動はもちろんのこと、凶悪犯罪さえも増加する危険性が生じるのである。自由で自主性を尊重して行われる現在の教育は、決して否定すべきものではないものの、ある一定年齢までは子ども達の家庭や学校での生活を十分に管理し制御する必要がある。自由度が過度ともいえる今の教育のあり方を変換する必要があるのではないか。さらに自由には責任を伴うという社会生活上の基本原則を低学年から徹底して教育しなければならない。

わが国では核家族化や少子化の進行が目立つ反面で、子どもの野生化が懸念される。教育を含めて次世代のものが先人の知的財産を受け継ぐという人的な循環型社会としての継承システムを再構築することが将来のわが国立国のために是非とも必要である。